Japanese Association for Religious Studies

今回比較対照としたのは①安永八年に刊行された収録遺文数三百五十五編の『祖書目次』（以下、『安永本』と略記す）、②弘化三年（一八四六）に改刻された収録遺文数三百五十八編の弘化改訂本『祖書目次』（以下、『弘化改訂本』と略記す）、さらに新たに確認することができた③常忍寺寄贈日蓮教学研究所架蔵写本『祖書年序新目録』（収録遺文数三百五十一編。以下、『常忍寺本』と略記す）の三本の異本である。

これら三種の『祖書目次』の遺文配置を比較検討した結果、

A『安永本』・『弘化改訂本』同一記載、『常忍寺本』記載なし
B『弘化改訂本』・『常忍寺本』同一記載、『安永本』記載なし
C『安永本』・『常忍寺本』同一記載、『弘化改訂本』記載なし
D『安永本』のみ記載
E『弘化改訂本』のみ記載
F『常忍寺本』のみ記載

と以上の六点の事が指摘できた。これら結果より、

（一）『常忍寺本』は『安永本』を底本とした可能性が高い。（B・Cによる）
（二）『常忍寺本』は『弘化改訂本』成立以前に書写されたか、あるいは弘化改訂本に依っていない。（B・Eによる）
（三）『常忍寺本』は安永本～弘化改訂本の間に成立した可能性が高い。

と、結果として三本の異本の成立について右記の三点が挙げられる。

鈴木一成氏がこの『祖書目次』について指摘している「この三部は出版後間もなく火災の為板木を焼失、絶版となっていた」の一文、つまり安永本はその出版部数が少なく希少であった、また当時刊本も書写されることが多くあったことより『常忍寺本』の筆者は『安永本』をただ書写するだけでなく自らの見解を踏まえ、『祖書目次』（『安永本』）の異本を作製し、それを受容していたことが指摘できるのである。それはまた日英による弘化年間の改訂を受けてはいないながらも同一部分も見受けられ、このことより『常忍寺本』の筆者はかなりの学僧（もしくは在家知識人）であったと推察できるのである。

近代日蓮仏教と生命言説
――日蓮系新宗教の救済観の比較――

大西克明

本報告は、近代における日蓮仏教と生命言説との関連について、日蓮系新宗教の「生命」についての言説比較から、その性質を明らかにしようとするものである。

我が国の新宗教研究において、仏教系新宗教を含む新宗教に通底する教えの構造として「生命主義的救済観」が指摘されてきた。それは、豊饒な産出力に満ちた宇宙＝生命という世界観であり、根源的生命との調和の回復が目指されるような救済観である。

だが、本報告では、生命主義的救済観の検討事例の対象とならなかった本門仏立講と、検討された創価学会との比較を通して再検討し、日蓮仏教と生命言説との関連について明らかにしたい。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

さて、生命主義的救済観には、アニミスティックな農耕心性が普遍的な救済の説明原理へと止揚されたものであるという前提があった。しかし、単に農耕心性の延長線上にあるのではなく、「生命」というコンセプトで諸相と人間の心の内奥を実在論的に説明しようとする思想状況（所謂、大正生命主義）への応答として、言説化された可能性も濃厚であるように思われる。

大正期、昭和初期の本門仏立講では、宇宙は「実相真如の妙理」として日隆門流の伝統的教義で説明されていたが、生命主義的救済観で指摘されるような生命言説は用いられていなかった。また、教化育成の場で語られる功徳・現証利益（仏果）の説明としては、信力に応じた仏力が顕現するとされ、実相真如の妙理との相即関係で説明されるものではなかった。

一方、大正三年、在家日蓮主義者を中核として結成された法華会の主要メンバーであった小林一郎は、その法華経解釈（『法華経大講座』）において、仏を無限の生命として把握し、大いなる生命の温かさと、そこに含まれる各自の生命との連関（同化し得る関係）について述べていた。

西洋流の理性哲学を生命言説で止揚しようとする小林の講義を聴き（中央大学）、また獄中で小林の書籍を取り寄せ、その影響を受けたと考えられる戸田城聖は、従来の日蓮仏教を大胆に生命論的に解釈するようになった。すなわち、宇宙大生命と調和のとれた状態こそが、各自の生命力の源泉であり功徳の源泉となる教説である。

これは、本門仏立講が、その宇宙観として、全宇宙は妙法そのものである、と説くにもかかわらず、生命力の増幅とそれに伴う現世利益をもって、仏果を判断する思考形式を有しなかったことと対照的である。

本門仏立講と創価学会という、基本的宗教性（現証布教や謗法観など）において酷似する日蓮系新宗教教団において、なぜ創価学会においてのみ生命主義的救済観が看取されたのかについては、それが、「生命言説」という時代の思想言説との応答関係のなかで練り上げられたものであったとみることができる。同じ新宗教でも、通時的分析を通すことで生命主義的救済観の生成に関し、有無や相違があることが指摘できよう。

これら日蓮系新宗教の比較から、近代の日蓮仏教において「生命」がどのように言説化されるかは、置かれた時代の思想状況との応答関係がより重要であり、農耕心性から直接的に派生したのではないことを指摘したい。

日蓮における信徒教化
――病を中心として――

奥野本勇

一　はじめに

日蓮聖人（一二二二―八二）は、仏教の教主釈尊が説かれた一代聖教の中で法華経が最上の教えであるとの確信のもと、法華経の行者として教化活動を展開されている。その実践・修行は法師品に示される「五種法師」の中の「解説」に当たる。

ところで、仏教においては、私たちが生存する以上、四苦八苦の苦しみがあるという。その四苦とは「生老病死」である。

NII-Electronic Library Service